ヒエロニュムス「ウルガータ聖書序文」翻訳と注解（1）
ガリア詩篇、ヘブライ語詩篇、サムエル記・列王記、ダニエル書

Jerome's Prologues of the Vulgate: Japanese Translation with Commentary (1)
Gallican Psalter, Hebrew Psalter, Samuel / Kings, Daniel

石川 立　　加藤 哲平
Ritsu Ishikawa　Teppei Kato[1]

キーワード：
ヒエロニュムス、聖書、ウルガータ、序文、詩篇、サムエル記、列王記、ダニエル書

KEY WORDS
Jerome, the Bible, the Vulgate, Prologue, Psalms, Samuel, Kings, Daniel

ヒエロニュムスの生涯

エウセビウス・ソフロニウス・ヒエロニュムス[2]（Eusebius Sophronius Hieronymus）は347年、ダルマティアのストリドンに生まれた[3]。両親は裕福なキリスト教徒で、ヒエロニュムスが地元の学校で初等教育を修めると、直ちに彼をローマに送り出し、高名な文法学者であるアエリウス・ドナトゥスのもとで古典文学と文法学を学ばせた。

ローマでの学びを終えると、ヒエロニュムスと友人のボノススは官僚のポストを求めてガリアの植民都市アウグスタ・トレウェロルムに赴いた。しかしここでヒエロニュムスは突然世俗の野心を捨て、キリスト教徒としての生き方を選ぶことを決意する。そこで彼はアクィレイアに移り、修道士のサークルと関係を持つようになった。しばらくして彼はエルサレムを巡礼しようとするが、その途次、病に伏せってしま

う。この闘病中、非常に印象的な回心体験をしたといわれている（*Epistula* 22.30、以下 *Ep.* と略す）[4]。この体験を経て、より本格的な修道生活を求めた彼は、シリア付近のカルキス砂漠に居を定めた（374年）。この地で彼はアラム語（またはシリア語）、ヘブライ語の学習を始めたようである。

健康上の理由からカルキスを後にしたヒエロニュムスは、司教パウリノスの勧めでアンティオケイアに移り、そこで叙階された（379年）。翌年、公会議が開かれていたコンスタンティノポリスに移ると、その地でナジアンゾスのグレゴリオスやニュッサのグレゴリオスに師事した。さらに翌年、今度はローマに移り、教皇ダマスス一世の秘書として働いた。教皇はヒエロニュムスを聖書学者として篤く信頼し、ついには福音書と詩篇の改訂を依頼するに至った。一方で彼はローマの貴族の女性サークルに紹介され、修道生活及び聖書の教師として信頼を得た。特に親しかったのは寡婦マルケラ、同じく寡婦パウラ、その長女ブレシッラ、三女ユリア・エウストキウムらであった。ところが384年、ブレシッラが過度の禁欲生活のために突然死する。むろん指導者であった彼は激しい非難を浴び、ローマを退去せざるを得なくなってしまった。

ヒエロニュムスは終の棲家をベツレヘムに定め、そこにパウラと共にそれぞれ男女別の修道院を建てた（385年）。そして彼は畢生の大作である、ヘブライ語原典からのラテン語聖書翻訳を始めたのだった。彼はまず、詩篇、サムエル・列王記、預言書、ヨブ記を立て続けに訳した（392–393年）。続いてエズラ・ネヘミヤ記、歴代誌を394–396年に、箴言、コヘレトの言葉、雅歌を398年に、モーセ五書、ヨシュア記、士師記、ルツ記、エステル記を398–405年に訳した。しかしこの新たなラテン語聖書は、神の霊感を得て訳されたと信じられていたセプトゥアギンタ（以下 LXX）や古ラテン語訳（LXX をラテン語に重訳したもの）の権威の前で、強い拒否反応を引き起こし、かつては親しい友人であったルフィヌスやアウグスティヌスらとの間で激しい論争が起こった。ヒエロニュムスの死は420年頃と言われているが、それまでに、パウラの死、ローマの陥落、修道院の焼き討ち、そしてエウストキウムの死などが相次ぎ、あまり幸せな晩年ではなかったようである。

翻訳と注解

凡　例

・底本として Weber, R. / Gryson, R. (eds.), *Biblia Sacra iuxta Vulgatam Versionem* (Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 2007 [1969]) を用い、Migne, J.-P (ed.), *Patrologia Latina* 28 (Paris: 1890) の各項も参照した。近代語訳としては Schaff, P. / Wallace, R.H. (eds.), *Nicene and Post-Nicene Fathers: Second Series* Vol. VI (New York:

The Christian Literature Company, 1893) があるが全訳ではない。

・翻訳部分において、（　）は訳者による補足、〈　〉は原文、「　」は引用句、または原文がギリシア語の部分、〔　〕は引用箇所を示す。
・聖書の引用句は、新共同訳を参看しつつ、文意に則して訳し直した。
・単語の音引きは原則として省略するが、慣例に従ったものもある（例：ウルガータ）。
・人名は原文ではすべてラテン語表記だが、ギリシア語で著作した作家はギリシア語読みに改めた（例：Africanus →アフリカノス）。
・著作名は、邦訳のあるものは日本語で、ないものは慣例に従って記した。

2つの詩篇の前文

解　題

382-385年、ヒエロニュムスはローマに住んでいた。そこで教皇ダマススの知遇を得て、写本間の異読の甚だしかった古ラテン語訳の福音書と詩篇の改訂を依頼された。現在のウルガータ訳に収録されている福音書はこのときの作であるが、詩篇の方は失われている。ベツレヘムに移ったあと（386年）、彼はヘクサプラに含まれるLXX詩篇をギリシア語からラテン語に訳した。さらに392年にはヘブライ語詩篇からの翻訳を作成している。つまりヒエロニュムスの詩篇は、ローマで古ラテン語を改訂した「ローマ詩篇」、ベツレヘムでLXXから訳した「ガリア詩篇」、同地でヘブライ語から訳した「ヘブライ語詩篇」の三種があるわけだが、このうち後代にまで強い影響を残したのはガリア詩篇であった。この名は、8世紀のラテン文法家であるアルクィンが、当時ガリア地方で普及していたこの版を優遇したことに由来する。以下に訳出した2つの詩篇の前文は、ガリア詩篇とヘブライ語詩篇に付されたもので、前者は387-8年頃パウラとエウストキウムに、後者は392年に友人のソフロニオスに宛てて書かれた[5]。

翻　訳

詩篇におけるエウセビウス・ヒエロニュムスの前文が始まる

以前ローマに居を定めていた折、私は（古ラテン語訳の）詩篇を改訂し、セプトゥアギンタの翻訳者たちに従って、駆け足にではあるが、大部分を修正したのだった。ところが、あなたがたが今度も見ているように、おおパウラとエウストキウムよ、それは写字生たちの過失によって損なわれてしまっているし、改訂済みの新版よりも間

違いだらけの旧版の方がなお優勢という有様だ。そこであなたがたが思いついたのは、喩えるなら、私が耕地においてはすでに開墾された畑を耕し直し、畔道の斜面においては（何度刈っても）再び生えてくる茨を根こそぎにすることであった[1]。そしてまた、あなたがたがそう言うのももっともなことだが、不快にも頻繁にはびこるものなどは、それを上回る頻繁さで刈り取られねばならないということであった。そこでいつもの前文によって、あなたがたには次のことを覚えておいていただきたい。というのも、あなたがたのせいで、思いがけず（私は）かかる大仕事に汗水たらすこととなったのだから。同様に、私が細心の注意を払った改訂版を自ら注意しいしい書き写すほどに、この種の写しをご所望だった方々にも覚えておいていただきたい。すなわち、読者は各々、横線や放射状の印、つまりオベルス（÷）やアステリスクス（※）を自分で識別してほしい。そして、例えばどこかで小さな棒印（オベルス）が先行しているのを見つけたら、そこから我々が印をつけてある二つの点（：）までは、セプトゥアギンタの翻訳者たちの版においては（その部分が）足されていると知ることができるのである。一方、星に似た印（アステリスクス）に気づいたら、それはヘブライ語の巻物から付加されたものであると知ることになる。こちらも同様に、二つの点（：）までである[2]。正確にいうと、テオドティオンの版に従えば（そうなっている）[3]。このテオドティオン訳というのは、言葉の素朴さに関してセプトゥアギンタの翻訳とそう違うものではない。私は、あなたがたのために、また勉強熱心な各々方のためにこの仕事をしたのだと自覚しているが、疑いもなく、（私への）妬みや傲慢によって、「非常に優れたものを学ぶよりも、それを侮っていると見られることを好む[4]」者どもや、また澄み切った泉よりも濁った小川から飲むことを好む者ども[5]がたくさん出てくるだろう。

前文終わり

訳　注

（1）　畑の比喩で、パウラとエウストキウムは再度の改訂・翻訳を依頼している。

（2）　オベルス記号は、ヘブライ語原文に対し、LXXでは付加されている箇所（例5:7 perdes÷omnes：qui loquuntur mendacium）、アステリスクス記号は、ヘブライ語原文に対し、LXXでは訳し落とされている箇所（例8:4 quoniam videbo caelos※tuos：opera digitorum）を示す。これはオリゲネスがヘクサプラで採用した方法である（Jobes, K. H. / Silva, M., *Invitation to the Septuagint* (Micigan: Baker Academic, 2005): 48–53参照）。記号自体はアレクサンドリア図書館でホメロスの叙事詩を校訂した古典学者たちが発明した。L・D・レイノ

ルズ／N・G・ウィルスン『古典の継承者たち ── ギリシア・ラテン語テクストの伝承にみる文化史』（国文社、1996年、24-25頁）参照。

（3）「ヘブライ語の巻物から」とあるが、ヒエロニュムスはヘブライ語ではなくテオドティオン訳を参照していた。オリゲネスも LXX と原典との比較にアクィラ訳を用いた（テオドティオン、アクィラ訳についてはヘブライ語詩篇の注（9）を参照）。Stemberger, G., “Exegetical Contacts between Christians and Jews in the Roman Empire,” *Hebrew Bible / Old Testament: The History of Its Interpretation* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1996) 1: 579.

（4）出典不明。ヘブライ語詩篇の前文にも同様の表現がある。

（5）ヒエロニュムスの新しい訳ではなく、従来の古ラテン語訳を使い続けようとする者たちのこと。

同じ書物（詩篇）への別の前文が始まる

エウセビウス・ヒエロニュムスが、親愛なるソフロニオス[(1)]に挨拶を送る。

ある者たちが、詩篇は5つの書物に分割されると考えていることを私は知っている[(2)]。つまりセプトゥアギンタの翻訳者たちの訳において、「ゲノイト、ゲノイト[(3)]」、すわなち「そうあれかし、そうあれかし」と書かれているところで、本が終わるというのである。これの代わりに、ヘブライ語では「アーメン、アーメン」と読まれる。しかし、我々はといえば、ヘブライ人たちと、そしてとりわけ新約聖書の中で常に「詩篇の書（sg.）」と呼んでいる使徒たちの権威に従い〔ルカ20:42、使徒1:20参照〕、これを一巻の巻物であると主張する。我々は、表題に置かれている次のような著者たちの詩篇全体を、証拠として出す。すなわち、ダビデはむろん、アサフ〔詩篇50, 73など〕やエドトン〔62〕、コラの子たち〔42, 44など〕、エズラ人ヘマン〔88〕、モーセ〔90, 91〕、ソロモン〔72, 127〕や他の者たちの詩である。これらをエズラは一巻に収めているのだ[(4)]。というのも、もしアーメンという語が ── これの代わりに、アクィラは「信じられるように[(5)]」と翻訳しているが ── それほどの数（5つ）の書物の最後に置かれており、文章や文の頭や末尾にほとんど置かれていないのなら、救い主も福音の中で、「アーメン、アーメン、私はお前たちに言っておく」〔ヨハネ1:51〕などとは決して言わなかっただろうし、パウロの書簡も作中にこの言葉を含んだりはしなかっただろう。また自らの巻物の途中にしばしばアーメンと挿入するモーセやエレミヤやその他の者たちも、多くの書物を今あるようなかたちにすることはなかっただろう。そして（もし詩篇が5部に分かれてしまうのなら）、ヘブライ語の書物の22という数字や、それと同じ数の神秘も変わってしまうことだろう[(6)]。そもそ

も、ヘブライ語のセファル・タッリーム〈Sephar Thallim〉という書名自体 ── すなわち賛歌の巻物と訳されるものであるが ──、これ自体が使徒の権威に一致して、複数の書物ではなく、一巻の巻物であることを示している[7]。

さて、君は最近あるヘブライ人と議論して、詩篇から救い主なる主のための証言を示したが[8]、そのヘブライ人は君を馬鹿にするために、ほとんど一語一語を通じて、ヘブライ語では君がセプトゥアギンタの翻訳者たちに基づいて反論したようにはなっていないと主張したものである。そこで君は非常に勉強熱心なことに、アクィラ、シュンマコス、そしてテオドティオン[9]のあとに続く新しい版を、私が（ヘブライ語から）ラテン語に翻訳するように求めてきた。というのも君が言うには、（上記）翻訳者たちの多様さのせいで君はすっかり混乱してしまっているし、君が陥っているところの（私への買い被りの）愛によって、私の訳[10]、あるいは私の見解で満足しているとのことである。君に押し切られてしまったので ── まったく君に対しては、私は自分にはできないことでさえできないと断れない ──、再び私は自分を中傷者どもの罵りに引き渡すことになった。といっても、君が友情における私の思いよりも、私の能力こそを必要としてくれていることは、むしろ好ましく思われた。私は自信を持って言おう。この仕事についての多くの証人を呼んだっていい。私は少なくとも自分がヘブライ語の真理〈hebraica veritas〉[11]から変え改めたことなど何もないとわきまえているのだから。それゆえに、もしどこか私の版が諸々の旧版と一致していないところがあったなら、誰でもいいからヘブライ人に尋ねてみたまえ。そうすれば、君ははっきりと、私が敵どもから故もなく糾弾されていることに気づくだろう。彼ら「非常に優れたものを学ぶよりも、それを侮っていると見られることを好む[12]」者どもときたら、何とも本末転倒な輩である。連中は常に新しい享楽を追い求めており、その欲望ときたら海のごとしで、満足するということがない。それにもかかわらず、どうしてことに聖書の勉強に限っては、古い味に引き寄せられてしまうのだろうか[13]。自分の先行者（セプトゥアギンタの翻訳者）たちに噛みついているからといって、私は、彼らの訳などこき下ろされて当然と思っているわけではない。かつて私は、彼らの翻訳を入念に改訂した上で、私の言葉（ラテン語）を話す人々に与えたものである。そうではなく、キリストに信仰を持つ人々の教会において詩篇を読むことと、個々の言葉について咎め立てしてくるユダヤ人に言い返すこととはまた別物だと私は言いたいのである。

もし私の小品を、申し出てくれたように君が、「嘲りを向けてくる者たちをむしろ愛しつつ[14]」翻訳しようとしているのなら[15]、また非常に博学な者たちをして私の無知の証人と為さしめようとしているのなら、君にかの一節、「森に木を運び込むべからず[16]」と言っておこう。こうした慰めがこの先私にないとすれば[17]、共同の仕

事における私への称賛や非難さえも君と共同のものであると、私が信ぜんことを。君が主イエスにおいて健勝なることを願うとともに、私のこともお忘れなきように。

前文終わり

訳　注

（1）　ソフロニオス（*De viris illustribus* 134、以下 *vir. ill.* と略す）。ヒエロニュムスの友人。ギリシア語の著作を数作ものした。注（15）も参照。

（2）　1-41、42-72、73-89、90-106、107-150篇の5部。

（3）　γενοιτο γενοιτο. 原文の通り、アクセント・気息記号は付さない。以下同様。

（4）　エズラが詩篇をまとめたというユダヤ伝承は、ミドラッシュ（聖書解釈）集、雅歌ラバー4.4.1にある。

（5）　πεπιστωμενως.

（6）　列王記の序文参照。

（7）　ヘブライ語ではセフェル・テヒリーム（סֵפֶר תְּהִלִּים）。セフェル（巻物）が単数形であることから、詩篇は一巻の巻物だと主張している。

（8）　議論とは、例えば110:1についてなど。「わが主に賜った主の御言葉」という一節の「わが主」を、ヤハウェと取るか、ダビデと取るか、またイエスと取るかは、議論する者の立場によって変わったはずである。この場合、ソフロニオスはこれをイエスと取るが、それに対しユダヤ人が、彼を「馬鹿にするために」反論したであろうことは想像に難くない。

（9）　後1-2世紀、LXX がキリスト教徒の聖書として定着してしまったことに対し、ユダヤ教側から新しいギリシア語訳聖書を作ろうという気運が生まれた。そうしてできたのがアクィラ、シュンマコス、テオドティオンの諸訳である。総じて LXX より正確で、しばしばユダヤ教聖書解釈を取り入れた訳となっている（Jobes / Silva, *Invitation to the Septuagint*, 37-42参照）。

（10）ガリア詩篇のこと。

（11）ヒエロニュムスの有名な術語。聖書におけるヘブライ語の優位を説いている（Rebenich, “Jerome: The Vir Trilinguis and the Hebraica Veritas,” 50-77; Brown, D., “Jerome and the Hebraica Veritas,” *Vir Trilinguis: A Study in the Biblical Exegesis of Saint Jerome* (Kampen: Kok Pharos Publishing House, 1992): 55-86等を参照）。

（12）出典不明。ガリア詩篇の前文にも同様の表現がある。

（13）いつも目新しいものを求めているのに、聖書に関しては頑なに古ラテン語訳に

固執し、ヒエロニュムスの新訳を認めない者たちを皮肉っている。代案「彼らは常に新たな享楽を追い求めており、その食道楽〈gula〉は近くの海（の幸）だけでは足りないにもかかわらず…」。gula は、古典期では「喉、食道」から転じて「食道楽」の意であったが、ヒエロニュムスは *Adversus Iovinianum* 1.36において、「肉欲」として用いている（Souter, A., *A Glossary of Later Latin to 600 A.D.* (Oxford: Clarendon Press, 1949) :166）。

（14）αντιφιλονεικων τοις διασυρουσιν.

（15）ソフロニオスは、ヒエロニュムスの *Ep.* 22、*Vita S. Hilarionis*、またヘブライ語からラテン語に訳した「詩篇」と「預言書」を、ラテン語からギリシア語に訳した（*vir. ill.* 134）。

（16）ホラティウス『諷刺詩』1.10。釈迦に説法の意。自分の無知は自分が一番良く知っているということか。

（17）自らの無知に開き直るという「慰め」。しかしこれはヒエロニュムス一流の韜晦趣味であり、自分を無知とは考えていないだろう。

列王記（サムエル記・列王記）の序文

解　題

「兜を被った序文」（Prologus Galeatus）の異名を取る有名な序文。文中の、「この書物への序文は、あたかも兜を被った原理原則〈galeatum principium〉として、我々がヘブライ語からラテン語へと翻訳するすべての書物に相応しいものとなり得る」という箇所に由来する。ヒエロニュムスの新しい訳を非難し、LXX や古ラテン語訳の権威を主張する者らに対して、この序文は「兜を被」り、hebraica veritas を主張しているのである。こうした宣言めいた内容を持っているために、本序文は彼の一大翻訳事業において最初に書かれたものだと考えられてきた[6]。そこから、翻訳自体もサムエル記・列王記から為されたと断定されたが、一方で序文と翻訳の年代は必ずしも一致しないとする意見もある。つまり序文のみ先行し、翻訳はあとから為されたかもしれないということである（逆の可能性もある）[7]。そもそも翻訳は、友人から要請された順に始められたので[8]、序文となる書簡を書いたのちに翻訳に着手したということは十分に考えられる。ともあれ、この序文は一般的には391年頃の作とされ、パウラとエウストキウムに宛てられている。

内容的にも極めて重要であり、例えば当時のユダヤ教とキリスト教の正典観、LXX におけるテトラグラムの表記法、トーラー・ネビイーム・ケトゥビームの構造理解、マソラー学者以前のヘブライ語発音など、多くの興味深い問題が含まれている[9]。

翻　訳

列王記[1] における聖ヒエロニュムスの序文が始まる

ヘブライ人のもとでは文字は22であることを、シリア人やカルデア人の言葉が証明している[2]。それらの言葉は大体ヘブライ語に似たものである。確かに彼らも、同じ響きだが異なった字体で22字を持っている。サマリア人もまた、モーセ五書を同数の文字で書いているが、それらは形と尖り方[3] に関してだけ異なっている。確かなのは、書記であり律法学者であるエズラが、エルサレムの捕囚や、ゼルバベルのもとでの神殿再建後〔エズラ3:8-6:22参照〕、現在我々が使っている（それまでとは）別の文字を作り出したということである。というのも、その当時まではサマリア人とヘブライ人の字体は同じであったからである[4]。民数記においても、この同じ算定（文字数）が、レビ人や祭司らの人口調査のもとで神秘的に示されている〔民数記3:39参照〕[5]。そして主の名であるテトラグランマトン（神聖四文字）は、あるギリシア語の巻物の中では、今日まで古代の文字で表されていることを我々は発見した[6]。また詩篇36篇〔37〕、110篇〔111〕、111篇〔112〕、118篇〔119〕、144篇〔145〕もまた、異なった詩型で書かれている一方で、同数のアルファベットで編まれている[7]。そしてエレミヤの哀歌（1-4）や彼の祈り、ソロモンの箴言もまた、「たくましい妻を見いだすのは誰か」〔箴言31:10〕と書いてある箇所から最後のところ〔-31〕において、（詩篇と）同数のアルファベット、あるいは同じ分け方によって算定される。さらに5つの文字は、ヘブライ人のもとでは二重になっている。すなわちハフ〈chaph〉、メム〈mem〉、ヌン〈nun〉、フェー〈phe〉、サデー〈sade〉である。というのも彼らはこれらに関して、語の先頭や中間と、終わりとを別様に書くのである。ここから、多くの書物のうちの5書も二重であると判断されている[8]。つまりサムエル記、列王記、歴代誌、エズラ記（エズラ＋ネヘミヤ）、キノット付きのエレミヤ書 ── キノットとは彼の哀歌である[9] ── のことである。それゆえに、我々が話すことすべてをヘブライ語で書くのに必要な22の文字があり、また人間の声が理解されるために基礎となる22の文字があるように、22の巻物が算定されるのだ。神の教えにおいては、この22の巻物の文字によって、またそれを取っ掛かりとして、道理をわきまえた大人たちでさえも、まだ乳を飲んでいるかよわい幼児のごとく教育されるのだ。

第一の書は彼らのもとでブレシート〈Bresith〉と呼ばれている。これを我々は創世記と言う。第二はヘッレスモート〈Hellesmoth〉で、出エジプト記と呼ばれる。第三はウァイエクラー〈Vaiecra〉、すなわちレビ記、第四はウァイエダッベル〈Vaiedabber〉、すなわち我々が民数記と呼ぶものである。第五はアッダバリーム〈Addabarim〉、すなわち申命記と題されているものである[10]。以上がモーセの五書で

あり、彼らはこれらを特別にトーラット〈Thorath〉、律法と呼んでいる[11]。

彼らは、第二を預言者の順番とする。そしてナウェの息子イエス、すなわち彼らのもとでイォスエ・ベンヌム〈Iosue Bennum〉と言われるイエス（ヨシュア記）から始める。それからソプティーム〈Sopthim〉、士師記を挿入する。また同じところにルツ〈Ruth〉を付け加える。なぜなら（ルツ記では）士師たちの時代に起きた出来事が語られているからである。第三はサムヘル〈Samuhel〉が続き、これを我々は王国記の第一、第二と言う。第四はマラヒーム〈Malachim〉、つまり列王記で、王国記の第三と第四の巻物が繋がったものである。マラヒーム、すなわち列王記と言う方が、マラホット[12]、すなわち王国記と言うよりもはるかに良い。というのもこの書物は多くの民族の諸王国を書き表しているのではなく、12の部族によって形作られる、一つのイスラエルの民のことを書き表しているからである。第五はエサイアス〈Esaias〉、第六はヒエレミアス〈Hieremias〉、第七はヒエゼキヘル〈Hiezecihel〉、第八は十二預言書、すなわち彼らのもとでタレアスラ〈Thareasra〉と呼ばれているものである[13]。

第三の順序は「アギオグラファ[14]」となる。第一の書物であるイォブ〈Iob〉から始まり、第二はダウィド〈David〉、すなわち5部に分割されるも、詩篇の一巻にまとめられたものである[15]。第三はサロモン〈Salomon〉で、以下の3書を持っている。箴言、つまり彼らが格言、マサロット〈Masaloth〉と呼んでいるもの[16]。次に伝道の書、すなわちアッコエレト〈Accoeleth〉。そして雅歌、すなわち彼らがシラッシリーム〈Sirassirim〉と題したものである。第六はダニヘル〈Danihel〉、第七はダブレイアミン〈Dabreiamin〉、すなわち歴代誌であり、これを我々は聖なる歴史全体をより明確に表す「クロニコン[17]」と呼べよう。この書物は我々のもとでは、パラリポメノン[18]（補遺）の第一または第二と書かれている。第八はエズラス〈Ezras〉で、これ自体はギリシア人と同様に、ラテン人のもとでも2書（エズラ記、ネヘミヤ記）に分けられている。第九はヘステル〈Hester〉[19]。

つまり合計22の古い律法の書物は、（我々が知っているのと）同様に次のようになっている[20]。すなわちモーセの5書、預言者の8書、そしてアギオグラファの9書である。しかしながら、ある人はルツ記とキノット（哀歌）とをアギオグラファの中に書き入れ、これらをアギオグラファの数の中に算定されるべきものと見なすかもしれないし、さらにこのことを通して、古代の律法の書は24書であるとするかもしれない[21]。ヨハネ黙示録は24という数字を、子羊を讃え、また自分たちの冠を、顔を伏せて示している24人の長老たちの24という数字をもとにして引き出している。彼らは前も後ろも、すなわち過去へも未来へも目をやることのできる4匹の獣の前に立ち、疲れを知らぬ声で叫ぶのだった。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、全能の主

なる神、かつておられ、今おられ、やがて来られる方」〔ヨハネ黙示録4:8〕。

この書物への序文は、あたかも兜を被った原理原則[22]として、我々がヘブライ語からラテン語へと翻訳するすべての書物に相応しいものとなり得るので、これらの書物以外はどれも、アポクリファの中に分けられるべきだと我々は知ることができる。それゆえ、一般にソロモンによって書かれたとされる知恵の書、イエスの息子シラクの書（シラ書）、ユディト、トビアス（トビト記）と牧者（ヘルマスの牧者）は正典に入らない。私は、マッカベウスの第一（マカバイ記一）のヘブライ語の書物を発見したが、第二の書（マカバイ記二）はギリシア語であり、このことはその「言い回し[23]」からも判断され得る[24]。

このようなことであるから、読者よ、あなたにお願いしたい。どうか私の仕事を古代の人々（セプトゥアギンタの翻訳者たち）への非難と考えないでいただきたい。神の天幕（教会）に対しては、めいめいが自分のできることを提供するものだ。ある者たちは金や銀や高価な大理石を、またある者たちは亜麻布や紫、真紅、緋色（の毛糸など）を提供する〔出エジプト記25:2-7, 35:5-9参照〕。もし毛皮や山羊の毛でも提供したとすれば、我々は正しいとされるだろう。しかし使徒（パウロ）は、より賤しむべきものこそが、我々にとって、より必要なものだと考えている〔一コリ12:22参照〕。従って、かの天幕全体の美しさも、また現在と未来それぞれを通して見る教会の輝きも、毛皮や山羊皮によって覆われているのであり、そうした価値のより少ないものが、太陽の灼熱や嵐の被害を防いでくれるのだ〔出エジプト記26:7-14, 36:14-19参照〕。それゆえに、まず私のサムヘルとマラヒームを読んでいただきたい。私の、と私は言う。私のと。というのも何度も訳し直し、より注意深く修正することによって、我々が学び知ったことは我々のものとなるからである。以前は知らなかったことを理解するようになったとき、もし感謝の念が湧いてきたら、私を翻訳者として評価していただきたい。感謝の念が湧かなければ、「言い換え魔[25]」とでも考えればいい。とはいえ私には、自分がヘブライ語の真理〈hebraica veritas〉から何かを変え改めたという自覚など全く以てないのだが。むろん、もし信じられないのなら、ギリシア語やラテン語の写本を読み、それをこちらの不出来な訳と比較してみればいい。そしてどこであれその中で矛盾していると思うところがあれば、ヘブライ人の誰かに尋ねてみたまえ。ヘブライ人にはより大きな信頼を委ねなければならないはずだ。彼が我々の訳にお墨付きをくれるなら、まさかあなたは彼のことを、同一箇所で私と同じように予言するような占い師だなんて考えたりはしないだろう。

そこで私はキリストの婢女たるあなたがた[26]にお願いする。すなわち、非常に貴重な信仰という香油によって、（席に）座る主の頭に油注ぎ〔マタイ26:7、マルコ14:3〕、また今やキリストとして父のもとへと昇っている救い主を、決して墓の中に

探したりしなかった〔ヨハネ20:15-17〕あなたがたのことである。どうか、私に対して凶暴な口振りで怒り狂い、町をうろつき、自らをキリストについて博学だと信じて吠えている犬野郎どもに対し〔詩篇58(59):7, 15〕[27]、もし彼らが他の者たちから盾を取り上げるならば、あなたがたの祈りという盾を置いていただきたい。私はおのれの無力を知っているので、絶えずかの人（ダビデ）の一節を心に留めている。「私の道を守ろう。舌において罪を犯さぬように。私は我が口に見張りを置いたのだ。私に逆らう罪人が列なしているから。私は黙り、慎み、そして善きことから沈黙した[28]」〔詩篇38(39):2-3〕。

序文終わり

訳　注

（1）　サムエル記、列王記のこと。

（2）　カルデア語とはアラム語のこと。ヒエロニュムスはシリア語、アラム語共に習得していた（Barr, J., “St. Jerome’s Appreciation of Hebrew,” *Bulletin of the John Rylands Library* 49 (1966-67): 286-88）。ダニエル書の序文を参照。

（3）「尖り方」〈apex〉は「字画」とも取れる（和田訳57頁）。

（4）　バビロン捕囚以前、ヘブライ語はフェニキア文字由来の古ヘブライ文字（paleo-hebrew character）で記されたが、捕囚以後、アラム語で使われていた方形文字（square character）に取って代わった。これが現在のヘブライ文字の原型である。しかし死海文書の一部やサマリア人の間では、方形文字への移行後も、依然として古ヘブライ文字が使われていた（Gesenius, W. / Kautzsch, E. / Cowley, A.E. [trans.], *Gesenius’ Hebrew Grammar* (New York: Dover Publications, 2006 [1910]): 24-25; Joüon, P. / Muraoka, T., *A Grammar of Biblical Hebrew* (Roma: Editrice Pontificio Istituto Biblico, 1993)1: 18-20）。文字の変更がエズラによって為されたとするユダヤ伝承は、タルムード（サンヘドリン21b-22a）に見られるが、ここではアラム文字ではなく「アッシリア文字」となっている。Moore, G.F., *Judaism: In the First Centuries of the Christian Era: The Age of Tannaim* (Peabody: Hendrickson Publishers, 1997 [1927])1: 25; 29ff. も参照。

（5）　ヘブライ語上で22×1000であるから、ここにも22があるという解釈。

（6）　ユダヤ人は、神の名を表すテトラグラム（יהוה）をアドナイ（我が主）と読みかえるが、この慣習の最古の証拠がLXXでの「主」（κύριος）という訳語である。しかし、LXXの原テキストではギリシア語文中でもテトラグラムのみ古ヘブライ文字等で記されたとする説（Waddell, Howard, Kahle）と、最初から

κύριος と訳されたという説（Baudissin, Hanhart, Wevers, Pietersma）とがある。ヒエロニュムスの証言は、前者を支持する。以下を参照。Howard, G., “The Tetragram and the New Testament,” *Journal of Biblical Literature* 96 (1977): 63-83; Pietersma, A., “Kyrios or Tetragram: A Renewed Quest for the Original Septuagint,” *De Septuaginta: Studies in Honour of John William Wevers on his sixty-fifth birthday* (Ontario: Benben Publications, 1984): 85-101; Wevers, J.W., “The Rendering of the Tetragram in the Psalter and Pentateuch: A Comparative Study,” *The Old Greek Psalter: Studies in Honour of Albert Pietersma* (Sheffield Academic Press, 2001): 21-35.

(7) 行の始めの文字がアレフベート順（acrostic）になるため文字数が分かる。『聖書学用語辞典』（日本キリスト教団出版局、2008年）の飯謙「アルファベット詩」（18頁）参照。

(8) ヘブライ語の22文字のうち上記5つがソフィート（語末形）を持ち（כ/ך, מ/ם, נ/ן, פ/ף, צ/ץ）、いわば二重になっているのと同様に、ヘブライ語聖書を構成する22書のうち5つも、上・下巻と二重になるという解釈。エウセビオス『教会史』6.25.2には、オリゲネスの失われた詩篇注解から、同様の説明が引用されている。

(9) キノット（קִנוֹת）。哀歌を意味するקִינָה の複数形。エイハー（אֵיכָה）ともいう。

(10) モーセ五書はヘブライ語で、創世記：ベレシート（בְּרֵאשִׁית）、出エジプト記：シェモット（שְׁמוֹת）、レビ記：ヴァイクラー（וַיִּקְרָא）、民数記：ベミドバル（בְּמִדְבַּר）、申命記：デヴァリーム（דְּבָרִים）と表記される。ヒエロニュムスは出だしの言葉から、出エジプト記をוְאֵלֶּה שְׁמוֹת、民数記をוַיְדַבֵּר と題している。彼はこうしたユダヤ教文書の命名法を知っていた（*Quaestionum Hebraicarum liber in Genesim* 1:1参照、以下 *Qu. Hebr. Gen.* と略す）。ヒエロニュムスのヘブライ語転写については、Barr, J., “St Jerome and the Sounds of Hebrew,” *Journal of Semitic Studies* 12 (1967): 1-36; Sutcliffe, E.F., “St. Jerome’s Pronunciation of Hebrew,” *Biblica* 29 (1948): 112-25参照。

(11) なぜトーラー（תּוֹרָה）が、あたかもスミフート形のトーラット（תּוֹרַת）のごとく転写されているのか不可解である。Nautin はこうしたヘブライ語についての誤り（?）に疑義を呈し、かつ注解に含まれるユダヤ教由来の聖書解釈もオリゲネスらの盗用であると断じて、ヒエロニュムスのヘブライ語能力を疑うが、Rebenich は様々な証拠からこれを否定する（Nautin, P., *Origène i: Sa vie et son oeuvre* (Paris, 1977); “Hieronymus,” *Theologishe Realenzyklopädie* XV. 1-2

(Berlin, 1986): 304-15; Rebenich, “Jerome: The Vir Trilinguis and the Hebraica Veritas,” 56-58)。

(12) マラホットとは、「王国」マルフート（מַלְכוּת）のこと。ちなみに「女王」マルカー（מַלְכָּה）の複数形はメラホット（מְלָכוֹת）。

(13) 預言者8書。ヨシュア記（יְהוֹשֻׁעַ）、士師記（שׁוֹפְטִים）＋ルツ記（רוּת）、サムエル記（שְׁמוּאֵל）、列王記（מְלָכִים）、イザヤ書（יְשַׁעְיָהוּ）、エレミヤ書（יִרְמְיָהוּ）＋哀歌（קִנוֹת）、エゼキエル書（יְחֶזְקֵאל）、十二預言書（תְּרֵי עֲשָׂרָה）。ヒエロニュムスは十二預言書を一つの書物と数えた（十二預言書の序文を参照）。

(14) αγιογραφα. 本来語頭に気息記号がつき、ハギオグラファとなるが、ヒエロニュムスはラテン文字転写の際も気息音を付していない。織田昭『新約聖書のギリシア語文法第Ⅰ分冊』（教友社、2003年、44頁）によると、気息音はコイネー期以降発音されなかった。

(15) ヘブライ語詩篇の前文を参照。

(16) 箴言はヘブライ語で、マシャール（מָשָׁל）の複数形メシャリーム（מְשָׁלִים）のスミフート形ミシュレイ（מִשְׁלֵי）と表されるが、ここでヒエロニュムスはメシャロット（מְשָׁלוֹת）という形を想定している。

(17) χρονικον.

(18) παραλειπομενον のラテン文字転写。織田（上掲書39頁）によると、ei という複母音はコイネー期以降 i 音になっていた。

(19) アギオグラファ9書。ヨブ記（אִיּוֹב）、詩篇（דָּוִד）、箴言（מְשָׁלוֹת）、コヘレト（קֹהֶלֶת）、雅歌（שִׁיר הַשִּׁירִים）、ダニエル書（דַּנִּיֵּאל）、歴代誌（דִּבְרֵי הַיָּמִים）、エズラ記（עֶזְרָא）、エステル記（אֶסְתֵּר）。ここでヒエロニュムスはダニエル書を、ユダヤ教と同様にアギオグラファ（ケトゥビーム）に収めるが、ウルガータでは *Danihel Propheta* と題し、預言者に含めている。ダニエル書序文注(20) を参照。

(20) 正典22書。この算定はヨセフス『アピオーンへの反論』1.38にも見られる。後の教父たちもヨセフスの記述から、正典を22書と説明する（エウセビオス『教会　史　』6.25.1)。Braverman, J., *Jerome’s Commentary on Daniel: A Study of Comparative Jewish and Christian Interpretations of the Hebrew Bible* (Washington DC: The Catholic Biblical Association of America, 1978): 37.

(21) 正典24書。預言書において士師記と合わさるルツ記と、エレミヤ書と合わさる哀歌とをアギオグラファに移し、モーセ5書、預言者8書、アギオグラファ11書の、合計24書。ダニエル書の序文に同様の説明がある。こちらはユダヤ教の伝統的な算定と一致する（第四エズラ記14:44-46、タルムード〔タアニート8a、

バーバー・バトゥラ14b〕、雅歌ラバー4.11.1、民数記ラバー14.4）。

（22）解題参照。principium は「開始、原則」の意だが、複数形で軍事用語として「前線」の意もある。ここでは「兜を被った」という語が先行していることもあり、この序文が、ウルガータ訳を中傷者たちから守る前線部隊の役目を果たしているというイメージが伺われる。

（23）φρασις.

（24）マカバイ記一は、元来ヘブライ語あるいはアラム語で書かれたとされる。ヒエロニュムスはその原本を知っていたようだが、現存しない。対してマカバイ記二は最初からギリシア語で書かれた（Swete, H.B., *An Introduction to the Old Testament in Greek* (Oregon: Wipf and Stock Publishers, 2003 [1902]): 276ff.）。

（25）παραφραστης. 自分の解釈を交えて本文をパラフレーズしてしまう者のこと。正確に内容を伝える「翻訳者」〈interpres〉と対比されている。

（26）明言していないが、パウラとエウストキウムが念頭に置かれている。

（27）*Qu. Hebr. Gen.* 序文では中傷者たちを「豚野郎ども」と悪罵している。

（28）ガリア詩篇からの引用。ここから、この序文が書かれた時点でヘブライ語詩篇は訳されていなかった可能性を指摘できよう。

ダニエル書の序文

解　題

ヒエロニュムスは当時教会で流布していたギリシア語のダニエル書が、LXX ではなくテオドティオン訳であったという報告から始め、続いてダニエル書がカルデア語（アラム語）で書かれた文書であることを説明したあと、自らのカルデア語学習の苦労話について語る。ここは *Ep.* 125におけるヘブライ語学習の苦労話同様、まさに彼の肉声を聞くかのような箇所である。そしてさまざまな事例を示しながら、ダニエル書補遺（アザルヤの祈りと三人の若者の賛歌、スザンナ、ベルと竜）はヘブライ語ではなくギリシア語で書かれたものだと説明していくのだが、特にスザンナに関しては、ラテン語の洒落まで持ちだしている。また、ベルと竜についての箇所では、当時のユダヤ人とキリスト教徒との間で交わされていた議論の一端を垣間見ることができる。

執筆は392年頃で、パウラとエウストキウムに宛てられている[10]。

翻　訳

預言者ダニエルにおけるヒエロニュムスの序文が始まる

セプトゥアギンタの翻訳者たちに基づく預言者ダニエル〈Danihel〉を、主なる救い主の教会は読んでいない。彼らはテオドティオンの版を使っているのだが、なぜこのようなことが起こったのか私は知らない[(1)]。というのもそれは、カルデア語がある独自性を持っているがゆえに我々の言葉（ギリシア語・ラテン語）と合致せず、セプトゥアギンタの翻訳者たちが翻訳において同じ区切り[(2)]を維持しようとしなかったからかもしれないし、あるいは彼ら翻訳者たちの名のもとに、十分にカルデア語を知らない者によって ── それが誰なのか私は知らないが ──、その書物が出版されたからかもしれない[(3)]。またあるいは私の知らない何か別の原因があったからかもしれない。私が確かに言えることはただひとつである。それが多くの点で真理から反しており、かつ正当な見解によって退けられているということである。確かに知られるべきは、特にダニエル書とエズラ記は、むろんヘブライ文字とはいえ、カルデア語で書かれたこと、そしてエレミヤ書の一節もそうであること[(4)]、またヨブ記がアラビア語と非常に多くの結びつきを持っているということである[(5)]。

さらに若かりし頃[(6)]には私もクインティリアヌス[(7)]やトゥッリウス（・キケロー）[(8)]を読み、レトリックの花に触れたあと、この言語（カルデア語）にパン屋さながら身を粉にして自らを開き、そして多くの汗と長い時間をかけて、やっとのことでハッと息を吐いたりシュッと音を出したりする言葉を発音し始めた[(9)]。それはあたかも洞穴を彷徨っているときに上から幽かな光を見始めたかのようであった。ところが最近私はダニエル書に打ち込んで、すっかりうんざりしてしまった。捨て鉢な気分になった挙句、昔した仕事を全部反故にしたくなったのである。しかし、あるヘブライ人が私を励まし[(10)]、彼の言葉で繰り返し、「辛い労苦がすべてに打ち勝つ[(11)]」と私に言い聞かせてくれた。そこで、自分が彼らの間で似非学者であるような気がしていた私は、再びカルデア語の一学徒として学び始めた。しかし正直に言えば、今日まで私は、カルデア語を発音するよりも読解することの方が得意なのである[(12)]。

それゆえに、諸君にダニエル書の難しさを示してあげよう。この書には、ヘブライ人の間ではスザンナの物語もなければ、三人の若者の賛歌もなく、またベルと竜の話もない。しかしこれらは巷間あまねく広まっているため、我々としては串印（÷）を前に置き、取り除いた上であとに付け加えておいた[(13)]。これは聖書に通じていない者たちのもとで、書物の多くの部分を切り離してしまったと思われないための処置である。私があるユダヤ人教師たちから聞いたところでは、そのユダヤ人教師の一人はスザンナの物語を小馬鹿にして、それは名もなきギリシア人によって捏造されたもの

だと言ったそうである。これはオリゲネス[14]に対してアフリカノス[15]もまた唱えた異議であるが、「スキーノス（乳香樹）からスキサイ（裂く）が、そしてプリーノス（樫の木）からプリサイ（切り裂く）が[16]」という「語源説明[17]」は、ギリシア語に由来するものなのだ〔Vg ダニエル（スザンナ）13:54-59〕。こういう洒落の理解を、我々のラテン語読者に対しては、次のように与えることができる。たとえば我々は、樫の木からは〈ab arbore ilice〉、「お前はすぐに〈ilico〉死ぬだろう」とダニエルは言った、と言うことができる。乳香樹からは〈a lentisco〉、「神の使いはお前をレンズ豆のように〈in lentem〉すり潰してしまうだろう」とか、「間もなく〈non lente〉お前は死ぬだろう」とか、「lentus、つまり証言を曲げたお前は死刑だ」とか、樹木の名前に引っ掛けて他にもいろいろと言うことができる[18]。それからそのユダヤ人教師は三人の若者たちがのんびりしていることを皮肉ったものである。つまり炎を上げて燃えている炉の中で詩を作って遊び、そして順番に神を賛美するためにあらゆる事象に呼びかけているほどの落ち着きようのことである〔ダニエル3:51-90（アザルヤ28-67）〕。奇跡やら主の使いのひと吹きの描写やらとは何のことなのか。あるいは瀝青のだんごで殺された竜だの〔ダニエル14:26（ベル27）〕、祭司どもがベル神の動力装置として捕らえられただの〔ダニエル14:1-21（ベル1-22）〕、一体何事か。こんなものは預言者の霊によって成し遂げられたことというより、小賢しい者の考えた戯言に過ぎないのではあるまいか。ハバクク〈Abacuc〉の場面に至り、ハバククがユダヤからカルデアへと皿を持ったまま連れ去られたという箇所を読み上げたとき〔ダニエル14:32-38（ベル33-39）〕、ユダヤ人教師はその先例を問うてきたものだった。つまり旧約聖書の一体どこで、聖者たちのある者が重い体でもって飛んだとか、一瞬のうちに地のこれほどの距離を移動したとかいうことを我々は読めるのかと。彼に対して我々のうちのある者が、待ってましたとばかりに公然と、エゼキエル〈Hiezecihel〉を例に挙げ、彼はカルデアからユダヤへと移されたのだと言うと〔エゼキエル8:3〕、ユダヤ人教師はその者を嘲笑い、そしてエゼキエル書そのものから、エゼキエルが自ら運ばれたことを見たのは霊においてであったと証明した。さらに我々の使徒（パウロ）もまた、自明のことだが、教養人として、またヘブライ人から律法を学んだ者として、自分が体において連れ去られたと断言しようとはしなかった。正確には彼は次のように言った。「体においてか、体を離れてか、私は知らない。神が知っている」〔二コリ12:2〕。ユダヤ人教師は、あれやこれやの議論によって、教会の書物の中に偽の物語があることを明らかにしたのだ[19]。

以上のことについては読者の裁量に判断を任せるが、私が注意したいのは、ダニエル書はヘブライ人のもとでは預言者の中にはなく、彼らがアギオグラファとして作成した中にあるということである[20]。書物全体は彼らによって、三つの部分に分けら

れている。つまり律法、預言者、アギオグラファであり、5書、8書、11書であるが、このことについて今は詳述することができない[21]。ポルフュリオス[22]がこの預言者から引き出したこと、というよりこの書物に対して投げかけた事柄については、証人としてメトディオス[23]、エウセビオス[24]、アポッリナリオス[25]がいる。彼らは幾千行もの文章をもってポルフュリオスの狂気に応えたが、そのことが読者の好奇心を満足させたかどうかは、私の知るところではない。そこで、私はあなたがたにお願いしたい、おおパウラとエウストキウムよ。私のために主への祈りを確かにして、この小さな体にいる限り、あなたがたへの何がしかの感謝を、また教会に役立つことを、またあとに続く者たちに価値あることを書けるようにしていただきたい〔二ペトロ1:13参照〕。むろん私は同時代人の判断などによっては決して動揺しない。そんな連中は好悪の感情（だけ）で、好き嫌いのいずれかに陥ってしまうのだ。

序文終わり

訳　注

（1）　ヒエロニュムスの時代以前から、ギリシア語のダニエル書に関しては、テオドティオン訳がLXXに取って代わっていた。時代を追うごとにLXX版は廃れ、今日では2つの写本を残すのみである（Jellicoe, S., *The Septuagint and Modern Study* (Oxford: Clarendon Press, 1968): 83-99; Braverman, *Jerome's Commentary on Daniel*, 31）。

（2）　原典の伝統的な読みの区切り方〈linea〉に、LXXが従っていないという可能性。

（3）　ヒエロニュムスはLXXのダニエル書がLXX訳者たちの作ではないことを意識して書いている。*Qu. Hebr. Gen.* 序文において、彼はヨセフスの証言を引き、LXX訳者たちが訳したのはモーセ五書のみと述べている。

（4）　ダニエル書2:4–7:28、エズラ記4:8–6:18; 7:12–26、エレミヤ書10:11はアラム語。創世記31:47にもアラム語が含まれている。

（5）　ここで言われているアラビア語と現在のそれとは同一視できない。ユダヤ人教師からの耳学問と思われるが、Barrはこれを当時の原始的な比較文献学に散見される誤りと指摘している（"St. Jerome's Appreciation of Hebrew," 297）。

（6）　アエリウス・ドナトゥスに師事していたローマでの遊学時代。

（7）　マルクス・ファビウス・クインティリアヌス。1世紀の修辞学者。『弁論家の教育』等の著作がある。ヒエロニュムスはローマ遊学時代にクインティリアヌスの修辞学を学んだ。

(8) マルクス・トゥッリウス・キケロー。前1世紀の政治家・哲学者。ヒエロニュムスは彼について、「ローマの雄弁術の頂点に立ち、演説とラテン語の王者として輝かしい栄光に浴していた」（*Qu. Hebr. Gen.* 序文）と最大級の賛辞を送っている。

(9) 374–379年頃、シリアのカルキス砂漠にいたときのこと。ここでヒエロニュムスは改宗ユダヤ人からヘブライ語、アラム語（またはシリア語）を習った。anherantia は帯気音・喉音、stridentia は歯擦音のこと（Sutcliffe, “St. Jerome’s Pronunciation of Hebrew,” 116-17）。同様の表現が *Ep.* 125.12にもある。

(10) ベツレヘムでのヒエロニュムスのユダヤ人教師として有名なのは、*Apologia contra Rufinum* 1.13, *Ep.* 84:3で言及される「バル・ハニナ」〈Baranina〉、ヨブ記の序文に登場する「リュッダのユダヤ人」、またトビト書の序文に登場する「カルデア人」の3者。ここで言及されているのは「カルデア人」であろう。むろん彼ら以外の多くのユダヤ人とも交流があったに違いない。

(11) ウェルギリウス『農耕詩』1.146。「ヘブライ人」がウェルギリウスの一節を「彼の言葉」、すなわちヘブライ語かアラム語で口にしたということ。

(12) トビト書の序文によると、ヒエロニュムスは同書を訳す際カルデア語写本を底本としたが、カルデア語に未熟であったため、ヘブライ語とカルデア語を両方解するユダヤ人を雇い、口頭でヘブライ語に訳してもらった上でラテン語に重訳した。

(13) ガリア詩篇注（2）参照。ウルガータでは3:24–90が「アザルヤの祈りと三人の若者の賛歌」、13:1–64が「スザンナ」、13:65–14:41が「ベルと竜」。つまり「アザルヤ」は巻末ではなく途中に挿入されている。

(14) オリゲネス（*vir. ill.* 54）。c.185– c.251。アレクサンドリア学派の代表的神学者。六欄聖書 *Hexapla*、『諸原理について』等の著作がある。ヒエロニュムスは当初オリゲネスに私淑していたが、後年その教説が異端視されるようになるや、口を極めて批判した。親友ルフィヌスとの確執もこのことに起因する（Rebenich, *Jerome*, 41-51）。

(15) ユリオス・アフリカノス（*vir. ill.* 63）。170年頃リビア生まれ。*Cesti, Chronographaia* 等の著作がある。ここで述べられている内容は *Ep. ad Origenem* 4-5に見られる。

(16) απο του σχινου σχισαι και απο του πρινου πρισαι. スザンナ54–55において、ダニエルが長老の一人に、どこでスザンナを見たのかと問い、長老が「乳香樹の下だ〈ὑπὸ σχῖνον〉」と答えると、ダニエルは「神の使いがあなたを裂く〈σχίσει〉」と答えた。ギリシア語の「乳香樹」と「裂く」とが洒落になってい

る。58–59でも同様に「樫の木」〈πρῖνος〉と「切り裂く」〈πρίσαι〉とが掛かっている。こうした言葉遊びはもとよりギリシア語で書かれていなければ不可能というわけである。ちなみにウルガータでは、前者を scinus, scindere として洒落を保存しているが、後者は prinus, secare となっている。また πρίσαι はテオドティオン版で、LXX では καταπρίειν。

（17）ετυμολογιας.

（18）スザンナでのギリシア語の洒落をラテン語で再現して見せている。

（19）当時のユダヤ・キリスト教間の論争について、Stemberger, “Exegetical Contacts between Christians and Jews,” 569-86を参照。

（20）*Ep.* 53.8及びウルガータにおいて、ヒエロニュムスは LXX の伝統からダニエル書を預言者の中に入れている。一方列王記の序文においてはユダヤ教の伝統からケトゥビーム（アギオグラファ）に含める。

（21）正典24書。列王記序文注（21）参照。

（22）テュロスのポルフュリオス。232年頃生まれの新プラトン主義者。*Contra christianos* というキリスト教徒への反駁書を書いたとされるが、コンスタンティヌス帝により焚書され、現存しない。

（23）オリュンポスのメトディオス（*vir. ill.* 83）。3世紀後半の神学者。『シュンポシオンあるいは純潔性について』等の著作がある。ポルフュリオスへの反駁書 *Contra Porphyrium de cruce* は現存しない。

（24）カイサリアのエウセビオス（*vir. ill.* 81）。c.260– c.338。主著『教会史』『福音の論証』など。ポルフュリオスへの反駁書は25巻書かれたが、現存しない。

（25）ラオディキアのアポッリナリオス（*vir. ill.* 104）。c.310– c.390。ポルフュリオスへの反駁書を30巻書いたとされる。ヒエロニュムスは直接彼に師事した（*Ep.* 84.3）。

注

1　翻訳・監修を石川が、翻訳・解題・訳注を加藤が担当した。

2　「ヒエロニムス」という表記が一般的だが、H・クラフト『キリスト教教父事典』（水垣渉・泉治典監修、教文館、2002年）に従い、「ヒエロニュムス」とする。

3　生年については諸説ある。Kelly, J.N.D., *Jerome: His Life, Writings, and Controversies* (London: Duckworth, 1975): 337-39参照。本稿では年代について Rebenich, S., *Jerome* (London & New York: Routledge, 2002) に従う。

4　書簡22は邦訳を参照（荒井洋一訳「ヒエロニュムス書簡集」『中世思想原典集成4　初期ラテン教父』、平凡社、1999年、672–733頁）。

5　Rebenich, S., “Jerome: The Vir Trilinguis and the Hebraica Veritas,” *Vigiliae Christianae* 47 (1993): 50-77 参照。

6　Kelly, *Jerome*, 160-63.

7　Kedar, B., “The Latin Translation,” *Mikra: Text, Translation, Reading, and Interpretation of the Hebrew Bible in ancient Judaism and early Christianity* (Massachusetts: Hendrickson Publishers, 2004 [1988]): 320-21; Rebenich, *Jerome*, 54.

8　Kelly, *Jerome*, 161.

9　邦訳として、和田幹男「ヒエロニムスのプロローグス・ガレアトゥス」『サピエンチア：英知大学論叢』第20号（1986年、49–65頁）と、小高毅編『原典　古代キリスト教思想史3　ラテン教父』（教文館、2001年、191–195頁）がある。前者は全訳、後者は抄訳である。

10　邦訳として小高（上掲書、197–199頁）があるが、抄訳である。